青年期女子におけるコンパニオン・アニマル（犬）との関係性および心理的役割の変化

Change in relationships and psychological roles with companion animals(dog) among adolescent girls

長嶺 沙耶
Saya Nagamine

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻　修士課程

キーワード：青年期，コンパニオン・アニマル（犬），関係性，心理的役割
Key words：Adolescent, Companion animals(dog), Relationships, Psychological roles

１．背景・目的

人と動物の関係は親密化し，今や人々にとって動物は親密で情緒的な関係を築く対象となり，コンパニオン・アニマル（companion animal; 以下，CA）とも呼ばれている．そのような変化に伴い，動物から得られる主な恩恵は実用的なものから関係性そのものに変化してきた（濱野, 2020）．動物から得られる恩恵は「心理的効果」「生理的効果」「社会的効果」の 3 つに大別され，現在はその中でも心理的効果が最も期待されていることから（内閣府, 2010; ペットフード協会, 2018），CA は人々の心理的サポートの役割を期待されていることが窺える．しかし，杉田（2003）によると，犬を飼育する事ではなく，その飼い犬への愛着の強さが心身の健康に影響を及ぼし，女性の方が男性よりも強い愛着を持つ傾向があることから，CA との関係（以下，対 CA 関係）と CA が果たす心理的サポートには個人差があると考えられる．

では, 対 CA 関係はどのように構築されるのか．まず，対 CA 関係が人の代わりとなる代理の機能（Veever, 1985）があることから，飼い主の人間関係の影響を受けながら構築されると考えられる．そして，対人関係も人間関係の中で構築されるものであり，特定の 2 者関係を理解する上で人間関係全体を把握する必要がある（高橋，2010）．これらのことから，対 CA 関係は代理の機能を持つゆえに, 対人関係と同様に人間関係の中で構築され，対 CA 関係を捉えるためには，飼い主の人間関係も捉える必要があると考えられる．なお，現在の人々にとって CA は親密で情緒的な関係を築く対象であり，心理的サポートとなり得る存在であるため，対 CA 関係を捉える際に着目すべき人間関係は，親密で心理的サポートを果たすような小さな人間関係だろう．また，人間関係は個人の発達や環境の変化に合わせて変化していくものであり，特に，思春期から青年期は家族や親友をはじめとする重要な他者をめぐる変化が大きい時期である（則定，2008）．そのため，思春期から青年期にかけて，対 CA 関係と CA が果たす心理的サポートも変化していくと考えられる．このように，飼い主にとっての対 CA 関係や CA が果たす心理的サポートは変化していくことが予想される一方, CA の非評価的姿勢や無条件な愛情を与えるという特徴によって，飼い主がありのままの自分らしく居られる感覚（本来感）と被受容感を得られることは変わらないと考える．思春期・青年期は自己形成の時期でもあり，その過程において，自己の否定的側面も排除せずに受容してくれる他者やありのままの自分らしい自分でいられる感覚(本来感)を味わえる居場所の重要性が指摘されている（伊藤・小玉，2005；石原，2013; 中藤，2011；竹田，2021）．すなわち，CA は飼い主に本来感や被受容感を与え，さらには居場所になることで思春期・青年期の自己の成長をサポートする役割を担うと考えられる．

以上のことから，本研究では，2 つの目的を設定した．1 つ目は，思春期から青年期までの対 CA 関係の変遷を代理の機能の観点から検討することである．2 つ目は，思春期から青年期までの CA の心理的役割の変遷を，CA から得られた心理的サポートから捉え，さらに CA が自己の成長のサポートを果たすか検討することである．

２．方法

・調査期間：2023 年 10 月 5 日～24 日
・調査協力者：思春期から青年期にかけて同一の CA（犬）と暮らした経験がある青年期女子 7 名
・調査項目：事前調査，インタビュー調査，事後調査を実施した．事前調査では，CA（犬）に関する情報，現在の対 CA 関係/人間関係，出会いの時期の対 CA 関係/人間関係について尋ねた．なお，人間関係と対 CA 関係を同時に測定する指標として「愛情の関係尺度（高橋，2010）」を使用し，対 CA 関係は加えて「人とコンパニオン・アニマル（ペット）の愛着尺度（濱野, 2007）」を使用した．インタビュー調査では，「コンボイ・モデル（Kahn & Antonucci, 1980）」を手掛かりとしながら CA（犬）との出会いの時期と現在における対 CA 関係/人間関係および CA から得た心理的サポート，さらに，対 CA 関係に変化をもたらしたエピソードを尋ねた．事後調査では，これまでの対 CA 関係を振り返ったことが現在の対 CA 関係および CA に対する意識に及ぼす影響と感想への回答を求めた．
・令和 5 年度大妻女子大学生命科学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：05-033）．

３．結果と考察

まず，対 CA 関係そのものについて，7 名全員から出会いの時期より現在の方が深い関係であるという旨の語りがあった．さらに，出会いの時期および現在において CA が果たしている代理の機能について，心理的機能（愛情の関係尺度），心理的距離（コンボイ・モデル），関係性の認知（インタビュー）の 3 つの視点から総合的に検討したところ，7 人全員が出会いの時期よりも現在の方が強い代理の機能を果たしていた．このことから，対 CA 関係が深まると同時に，CA の果たす代理の機能も強くなることが示唆された．また，対 CA 関係に変化をもたらしたエピソードについて，最も多く挙げられたのは，CA が心理的サポートを果たしたというエピソードであり，いずれのエピソードも人間関係に関する悩みが生じた時に CA が心理的サポートを果たしていた．このことから，ただ人間関係が変容することが対 CA 関係に変容をもたらすのではなく，人間関係の変容によって生じた悩みに対して，CA が心理的サポートを果たした時，対 CA 関係が深まることが示唆された．したがって，人間関係の変化が多く，そうした人間関係に関する悩みを抱えやすい思春期から青年期においては，CA がその心理的サポートを果たすことで対 CA 関係が深まると同時に代理の機能が強くなると考えられる．

思春期から青年期にかけて CA が果たした心理的サポートについては，事例によって様々な変化が見られた．具体的には，同じ行為から得られる心理的サポートがより強くなっていたり，より複雑な心理的サポートを受けるようになっていたり，さらには出会いの時期には心理的サポートを一切受けていなかったのが現在は心理的サポートを受けるようになっていた事例もあった．このように変化の仕方は様々だが，いずれの事例においても出会いの時期と現在では心理的サポートの量や質が変化し，より豊かな心理的サポートを受けるようになっていた．したがって，思春期から青年期にかけて，CA から得られる心理的サポートはより豊かになることが示唆された．

また，CA が果たす自己の成長のサポートについて，CA が居場所として機能していた事例では，いずれの事例も人間関係の中で居場所を確立させることが困難な状況で，CA が居場所としての役割を担っていた．そして CA が居場所になり得た要因として，非評価的姿勢や無条件な愛情に加え，CA は決して他者に口外しないという安心感が挙げられた．このことから，CA は人間関係の中で居場所を得られなかった時に居場所になってくれる存在であり，それによって思春期・青年期の自己の成長をサポートし得る存在であることが示唆された．また，複数の事例において CA が家族関係を改善したという語りがあった．これは，CA が社会的潤滑油として機能することで，家族という自己の成長を支える最も身近な人間関係が整えられ，間接的に自己の成長をサポートしていると考えられる．

付記
大妻女子大学人間生活文化研究所令和 4 年度，5 年度大学院生研究助成（B）課題番号 DB2228「ラポール形成におけるアニマルセラピーの有効性の検討」，DB2329「青年期女性におけるコンパニオン・アニマル（犬）との関係性および心理的役割の変化」を受けて行ったものである．

主要参考文献

[1] 濱野佐代子（2020）．人とペットの心理学―コンパニオンアニマルとの出会いから別れ―　北大路書房．